

江崎一生 加守田章二 森陶岳

1969-71 | 変容する陶の交差

2026年

9月6日[日] ↓ 11月29日[日]

開館時間… 9時30分～17時（入館は16時30分まで）

休館日… 月曜日（祝日の場合は翌日）、11月4日（水）、ただし秋の陶器市のため11月2日（月）は開館

入館料… 大人600円（550円）／小中学生300円（250円）

※（）内は20名以上の団体／65歳以上は300円（要証明）

主催… 益子町文化のまちづくり実行委員会 益子陶芸美術館
後援… 下野新聞社 とちぎテレビ 栃木放送 エフエム栃木 もおか新聞 Dins

益子陶芸美術館

栃木県芳賀郡益子町益子3002-1
TEL: 0285-17217555
www.mashiko-museum.jp



※今後の状況により展覧会中に変更が生じる場合があります。最新情報は当館ウェブサイト・Facebook・X・Instagram等でご確認ください。

回覧



江崎一生《灰釉陶文大器》1969年 国立工芸館



森陶岳《砂壺》1969年

1969年から1971(昭和44~46)年までの3年間にわたり、東京・有楽町の交通会館ギャラリー・手において、「江崎一生・加守田章二・森陶岳」の三人展が開催されました。東京国立近代美術館の工芸課長であった吉田耕三によって企画され、当時最も活躍していた作家が選ばれました。これまでにない創造的な陶芸作品を吉田はテーマとして提示し、作家たちはこの趣旨を忠実に守るべく、現代にまで語り継がれるほどの優れた作品を制作していきました。

江崎一生(1918-1992)は常滑の陶芸家で、古常滑を範とした灰釉作品で知られています。最初は火鉢など大物作品の轆轤職人として従事していましたが、1956年から陶芸家の道に入り、金重陶陽から古常滑を学ぶよう助言を受け、以降古常滑の研究に没頭します。

加守田章二(1933-1983)は益子の陶芸家で、灰釉作品や焼締による造形的な作品を制作しています。第1回三人展に「柘器」、第2回には「曲線彫文」、そして第3回には「彩陶」と、陶芸史上における名作をこの頃次々と生み出しました。

森陶岳(1937-)は備前の陶芸家で、古備前を研究し、桃山時代の備前で用いられていた大窯を再現したことで知られています。森はこの三人展で、これまでのスタイルとは全く異なる、土器風の新たな作品を発表しました。

1969年から1971年にかけての期間は、三人がそれぞれの創作段階において、変容を遂げた時期でした。加守田が作陶の拠点とした益子の地で、改めて三人の陶芸が交差した時代を切り取ることで、その新たな表現が今日の陶芸に与えた影響を探ります。



江崎一生《灰釉花器》1963年 国立工芸館



森陶岳《彩文土器》1970年



加守田章二《扇形彫文鉢》1970年 京都国立近代美術館



加守田章二《彩彩陶》1971年 益子陶芸美術館



加守田章二《立方壺》1969年 国立工芸館

同時開催

2階展示室 スポットライト
「瀬戸 浩」
9月6日(日) — 11月29日(日)

笹島喜平館
「日本拓版画会展2026」
10月20日(火) — 11月23日(月・祝日)

次回展のご案内

「益子国際工芸交流事業共催
ジェニファー・リー 土の陰影」
2026 2027
12月13日(日)~4月4日(日)

※今後の状況により展覧会予定に変更が生じる場合がございます。
最新情報は当館ウェブサイト・Facebook・X・Instagram等でご確認ください。

Access

益子陶芸美術館

Mashiko Museum of Ceramic Art

〒321-4217 栃木県芳賀郡益子町益子3021
TEL.0285-72-7555
www.mashiko-museum.jp

アクセス：【バス】東武宇都宮駅、JR宇都宮駅西口14番バス乗り場から関東バス益子行、またはJR秋葉原駅から茨城交通「関東やきものライナー」笠間・益子行で益子陶芸美術館入口下車徒歩2分。【鉄道】JR小山駅から水戸線下館駅下車、下館駅から真岡鐵道で益子駅下車徒歩25分。【自動車】常磐自動車道友部JCT経由、北関東自動車道役川筑西ICから20分。東北自動車道栃木都賀JCT経由、北関東自動車道真岡ICから25分。
※運行状況は各交通機関にて確認ください。 ※陶器市期間中、美術館の駐車場はご利用いただけません。

